

エスノ・ソシオロジーの誘惑

岡田 光弘

0. はじめに

日本語で読めるエスノメソドロジー（以下、本文中においてはEMと略称する）の解説論文のひとつにジョージ・サーサスの「エスノメソドロジー—社会科学における新たな展開」がある。この論文は、EMを実際に行なっている現役のEM研究者が書いたEMについての紹介論文であり、EM研究者の自己認識として貴重なものである。日本人の手によってかかれた論文を含めて、EMについての論文は、既に数多く公刊されているものの、この論文のように手短かにEM研究者の自画像が描かれているような、そういった論文は、意外に少ないのである。彼はこの論文で、EMとは何であるのかを説明する際に、気になる言葉「エスノ・ソシオロジー」（以下、本文中においてはESと略称する）という言葉を用いている。

サーサスは、ハロルド・ガーフィンクル自身はこの言葉を用いてはいないが、という但し書きをつけたのちに、EMとESというものの異同を論じている。邦訳を読むかぎり、ここでのサーサスのトーンは、基本的にESに好意的であるように見える⁽¹⁾。ところで最近、筆者は、少なくとも二度は（1960年、1968年）、この言葉が、EMの創始者であるガーフィンクル自身によって用いられていることを発見した。また、ガーフィンクルと並んで、あるいはガーフィンクル以上にEMの発展に寄与した、ハーヴィー・サックスは、1968年に開催されたバーデュー・シンポジウムにおいて、エスノ・諸科学の一部としてのESについて検討している。さらに、EMの代表的な作品として邦訳もある「コードを告げるということ」の著者であり、ガーフィンクルのEMの正統な継承者のひとりであるとされているローレンス・ウィダーも、1977年に「伝統

的」EMとESを対比させてEMの性格について論じている。しかしながら、ガーフィンケルの用語法に反して、両者においてはESという言葉が、EMがそうであってはいけないものという意味で用いられている。筆者はこれに興味を引かれた。

EMという奇妙な名前を聞いた社会学者なら、一度は、これがエスノグラフィーと呼ばれている諸研究とどう違うのか？という疑問をもつように思われる。ここでは、直接にはこの疑問に答えない^{(2) (3)}。しかし、EMの「エスノ」という語根が「民族の」といった意味であるのなら、EMとエスノグラフィーの異同という疑問と同様に、何故、現在、EMと呼ばれているものは、民族の社会学、すなわち、ESではないのか？という疑問が生じよう。EMは、何故、ESと呼ばれないのか。EMは、ESとどう違うのだろうか？少なくとも、ガーフィンケル自身の申し立てによれば、EMがEMと呼ばれるようになったのは、偶然的なきっかけによっていたようだ[Hill and Crittenden, 1968]。とはいえ、それがESと呼ばれなかったことによって、のちにESにはEMと対比的な意味が与えられることになった。そこで、ESという言葉に狂言回しに「EMとは何であって、何ではないのか」について考えてみよう。

1. 狂言回しとしてのエスノ・ソシオロジー

サーサスは、その報告において、ガーフィンケルの用語法、サックスの用語法、ウィダーの用語法には触れずに、独自に、ESという用語について語っている。このように、同じESという言葉が異なった意味で用いられるので、これから、いくつかの用語法が比べられる場合には、それらを区別するためにやや煩雑になるのを承知で、それぞれをガーフィンケルの用語法、サックスの用語法、サーサスの用語法、ウィダーの用語法と呼んでみよう。また、これから扱われる諸論文は、比較的入手しづらいものばかりなので、それぞれについて多少丁寧かつ長めに引用することにしよう。予告的に示しておけば、ガーフィンケルの用語法とサーサスの用語法の性格、サックスの用語法とウィダーの用

語法の性格がそれぞれ近いように見受けられる。

- (1) ガーフィンケルとサーサスとにおいては、それまでの社会学と ES というものの視点の違いを示すために、構築的分析とそれ以外のものという対比が重要なのだ。そのために、ES という概念を媒介的に用いているように見える。
- (2) サックスとウィダーとにおいては、ES には科学的思考の派生体という性格が与えられている。図示しておけば、以下のようになる。

図 1

- (1) 社会学 ≠ エスノ・ソシオロジー ≡ エスノメソドロロジー
- (2) 社会学 ≡ エスノ・ソシオロジー ≠ エスノメソドロロジー

2. エスノメソドロロジーの命名者である

ガーフィンケルにとってのエスノ・ソシオロジー

ガーフィンケルが実際に、ES というものについて語っているので、それについて見ていこう。ガーフィンケルは、パーソンズ流の科学的な社会学に対して異を唱え、「社会学者による科学者の視点」と「社会学者による行為者視点」からなる真の社会構造というものに対するもうひとつの別の見方という意味で、シュッツの現象学の在り方と同一のものとして、この言葉を使っているようだ。

真の社会構造と適切に対象をなすのは、エスノ・ソシオロジー的に記述された社会構造というものだろう。エスノ・ソシオロジー的に記述された社会構造は、社会構造についての常識的知識からなりたっている。社会学的にいつて、社会構造についての常識的知識、すなわち、「共通文化」が、言及しているのは、人々が日常的な出来事の中で用いており、彼らがグループの属する他の成員たちも、同様に用いているだろうと思っている、そういった推論と行為という、社会的なサンクションにもとづいた基盤である。(下線は Garfinkel)

[Garfinkel, 1960: 23]

ガーフィンケルの言うエスノ・ソシオロジーの特徴は、社会学ならざるものとしてのESの強調である。「社会学者による科学者の視点」と「社会学者による行為者視点」からなる真の社会構造と対峙させられるべき、ES的に記述された社会構造というものが想定されている。「社会学者による行為者視点」という社会学の陥穽を認識論的に乗り越えようとするならばそれは、現象学というシュッツの継承にその可能性を見いだすことになる。

3. エスノ・ソシオロジーという仮想敵の継承

一方、サックスは、EMが何ではないのかについて説明するための仮想敵として「ES」の存在を仮定する。エスノ・ボタニー（植物学）、エスノ・メディスン（医学）といったエスノ諸科学とEMを対比するためにこの言葉を使う。認識人類学が主張するような、人類に普遍の分類の仕方と、そのなかにそれぞれの位置をもつ、民族に相対的な分類の仕方という対比にのっとって、エスノという言葉は民族に相対的なものを指示している。少し長くはなるが、この部分を引用しておこう。

エスノメソドロジーとエスノ・ソシオロジーとの相違点を明らかにしておくことは、価値のあることだ。エスノ植物学、エスノ天文学、といった領域は、それ以前に、科学的な植物学、科学的な天文学といったものが存在することによって成り立つ。基本的に、その使用法は、通・文化的な状況に向けられており、そこでは、ある人が、出会った文化においてみつけた、さまざまな植物学の概念を、普遍的な基盤のうえに配置可能であることを望むのである。そして、そこでは、ある人が発見した植物学の概念は、科学的な植物学のひとつの変異体として取り扱われる。たとえば、ひとは、私たちの可能性の科学的な組織化のうえに、色の諸概念を位置づけるだろうし、それにより、さまざま

まな社会の比較が可能になる。…(中略)…問題はこうである。これまで科学的な諸領域を打ちたててきた、それぞれの主要な学術論文は、人々が知っていて、用いているものは誤っているということで話をはじめているので、明らかに、「科学」の諸提言を考えることは、人々が知っていて、用いているものについて発見をするための方法ではありえない。そうではなくて、私たちが望むのは、人々がたまたまもっているどんな知識にでも、それに対応する、実施可能で使用可能な手続きを見つかることができるかどうかを見定めることである。人々は、世界について知っていくために、どのような手続きを用いているのだろうか？この点で、エスノメソドロジーの目的は、私たちが学んだものをそれ以前に与えられている基盤のうえに位置づけることである。そして、エスノメソドロジーは、エスノ・サイエンスのなかのひとつの特定領域なのではない。エスノメソドロジーは、多分、エスノ・ソシオロジーならそうするようには、アメリカのエスノ・ソシオロジーとか、ブルンジのエスノ・ソシオロジーといったものがそれとの対比で位置づけられるような構造として想定される社会学という科学の存在を軸にしてはいない。 [Hill and Crittenden, 1968:12f]

サックスは、普遍的／文化相対的、科学／(潜在的に)科学の下位領域の擬似科学という対比の後者の側にESを割り振った。1968年当時のサックスは、ガーフィンケルの未刊行の諸著作を大学院の仲間たちに解説つきでサーキュレートしていたといわれている。それゆえ当然、「パーソンズ入門」を読んでいたと思われる。それならば、サックスの用語法には、ガーフィンケルの影響が発見できるはずである。とすればそれは何か、そしてまたガーフィンケルの用語法とサックスのそれとを隔てるものは何か？ガーフィンケルとサックスとがともに強調するのは、ある種の認識論の陥穽である。そして、もし、認識論的な乗り越えが可能であるならば、ガーフィンケルにとってそれは、シュッツの現象学のめざすもの、すなわち、この場合のESである。一方、サックスにとって、それはすでに人々によって、たとえば自然科学の「観察可能－報告可能－教授可能」な実践として解消されているのである。サックスにとって、人々の

実践を再び科学の名のもとに切りわけて隷属化するのがESなのである。

ウィダーも同様に、EMが何ではないのかについて説明するために「ES」という概念を用いている。だが、彼が「ES」と対比させているのは「伝統的」なEMである。但し、ここでの「伝統的」なEMとは、1956年から1968年までのガーフィンケルによるもの[Wieder,1977:9]である。この1968年がバーデュー・シンポジウムのあった年であるのは興味深い。

同様に、その社会(folk)の理論化の理論、概念、方法、あるいはその性格上、社会的な何ものかを探究する、エスノ・ソシオロジーというものを想定することができよう。たとえば、そういったものがあるとして、ある社会の成員によって、どんな役割理論が採用されているのだろうか？そして、そういった理論が、その社会で人々が経験していくものとしての役割の世界をどうやって組織化しているのか？エスノ・サイエンスとの関連でいえば、エスノメソドロジーは、エスノの一学問領域としてその社会の学問領域で採用されている諸方法についての一般的な研究である。

エスノメソドロジーにおいて「方法(method)」という語句は、単純に「方法論」を意味している。それは、科学の方法にみられるようなものである。—化学、生物学、社会学、あるいは歴史学でさえ、またそれ以外にも方法がある。ちょうど、エスノ植物学という研究の領域に植物学との類似点が、みいだせるようにして、私たちは、「その社会の人々」の推論のなかに科学的な推論との類似点をみいだすことができよう。それゆえ、エスノメソドロジーというものがあるのだ。

[Wieder,1977:1f]

その社会の社会学として、エスノ諸科学のひとつとしてのESと、(科学そのものをも含めた)エスノ諸科学を横断する「方法論」の研究であるEMとの対比は、サックスの用語法と一致している。この点でサックスの用語法とウィダーの用語法とは多くの点で重なっている。

(1)エスノ・ソシオロジー的な諸研究というのは、人間による人間についての物語の実体的な研究である。そういった諸研究は、明らかにエスノ心理学とエスノ精神医学と深く結びついている。多くの異なった種類の物語、物語ること、物語の語り手、といったものを発見することができる、ということが予見できよう。私には、こういった事柄すべての間に興味深い関連性がみつかるだろうと思われる。そして、ある点で、物語、物語ること、物語の語り手、といった事柄は、社会の成員たちによって物語が受け入れられ、行為されるさまざまに異なった仕方に影響を与えるだろうと思われる。

(2)エスノメソドロジーは、社会の成員たちがもっている実践的、方法論的な関心であると考えられてもよいような、物語と物語ることの形式的な特性に関心があるといってよいだろう。社会の成員たちは、科学者たちの方法論的な関心と軌を一にしているようにみえるかたちで、その物語の客観性、事実性、合理性、論理性、といった特徴に関心がある。客観性、事実性といった、あるいはその他の事柄は、その後の推論と行為の根拠として、物語の受け入れ可能性やその知覚上の利用可能性に直接的に結びつけられているようにみえる。

[Wieder,1977:5f]

結果として、ウィーダーの議論においては、EMという研究方法論を採用したときには、そこには自己適用の必要性が生じてくる。ウィーダーの強調点は、ESとEMとの探究の対象の範囲が異なっているという単純な議論ではない。ESにはなくて、EMにあるのは、一種の循環性である。自然言語によって自然言語のなかに顕れる対象を記述するという循環性である。強調すべきなのは、この循環性が、決して自己反省的な循環性ではない、ということである。繰り返せばそれは、私たちが社会学的な探究を行なうさいに、無自覚に資源として用いている日常的な方法自体を探究の対象とするということなのだ。

ここでいうEMの自己適用は、無限背進を生まないということは、いくら強調してもしすぎることがないほど重要な点である。もし、ここでいうウィーダーの用語法の立場で、反省性を重視して理解しようとするれば、自己の対象

記述の自己記述という無限背進する、果たしえない課題をすべての研究が負うことになる。結果としてそれは、経験的な調査の不可能性を引き起こす。

おわりに

これまで見てきたように、ESという言葉は、ガーフィンケル、サックス、ウィダー、サーサスという主要なエスノメソドロジストの著作や発言において、EMについて語るときに要所所で用いられてきた。

そこでの「ES」は、普遍的な科学、社会学に対して、あきらかに相対主義を主張している。そして、サックスとウィダーの用語法においては、「ES」を、二重の意味で相対主義を主張しているものとして設定している。そして、EMの立場をそれと対比させることで、EMに対する、ありうる誤解に備えているようにみえる。

「ES」という一種の思考実験によって提示されている、二重の意味の相対主義のひとつは、存在論的な相対主義であり、もう一方の相対主義は、いわば方法論的な相対主義である。ここで、あえて明確なテーゼとして申し述べておくならば、EMは、徹底して方法(論)的な相対主義のみを主張する。そして、これが存在論的な相対主義あるいは、独我論を帰結しないということを明確にするために、仮想敵として「ES」を用いる。ガーフィンケルの「社会学者による科学者の視点」と「社会学者による行為者視点」からなる真の社会構造と対峙させられるべき、ES的に記述された社会構造というものが、サックスやウィダーのいう仮想敵としてのESに堕しないために、すなわちEMがESにならないためには、ESの誘惑に抗するためには、シュッツを認知主義的に読解することで生み出される自己反省の無限背進に陥らないような方法(論)的な相対主義の徹底が望まれる。そして、蛇足ながら付け加えておけば、方法(論)的な相対主義の徹底は、EMに存在論的な相対主義の主張とは捻れの位置にある、存在論をしないという位置価を与える。

〈注〉

- (1) 個人的なコミュニケーションによれば、ジョージ・サーサスの言いたかったことも、その違いの強調にあったようだ。その場を共有していなかったものとして、少なくとも翻訳文からは、サーサスがESに共感的であるように読める。
- (2) EMとエスノグラフィーとの境界線を最小に設定する立場がある。この折衷主義の戦略は、日本で編まれ出版されている『エスノメソドロジーの現実』に色濃く見られる。仮にここでは、この立場をラディカル・エスノグラフィーの立場と呼んでおく。そして、このような立場を「ラディカル」と呼ぶ根拠は、研究者たるもの自らのおかれた状況に反省的であるべきだという格律に由来する。この立場は、しかし、EM研究者が「単独の研究者」として適切に研究しているかを、その「単独の研究者」自身が、反省的に捉えかえすべきだという主張をしているように思われる。しかし、いわゆる会話分析を含めて、EMという営みは本来、そういった「単独の研究者」という見方自体を認識論的に問題ををはらむものとして批判し、変更を加えようとしているものであった。
- (3) ロドニー・ワトソンは「アイロニックな分析」と「アイロニックではない分析」という区別を設定している。「アイロニックな分析」においては記述者が「潜在的機能」「虚偽意識」といった説明概念を構築することで、現象を説明し尽くすことを目指す。

〈文献〉

- Garfinkel, Harold 1960 Parsons Primer: Ad Hoc Uses, Unpublished Manuscript, U.C.L.A.
_____ 1974 'The Origins of the Term Ethnomethodology', in Turner, Roy (ed.)
Ethnomethodology: 15-18, Penguin. = 1988 「エスノメソドロジー命名の由来」,
山田 富秋・好井 裕明・山崎 敬一訳『エスノメソドロジー—社会学的思考の解体
—』: 9-18, せりか書房.

- Hill, R. J. & Crittenden, K. S.(eds.) 1968 *Proceedings of the Purdue Symposium on Ethnomethodology.*
- Psathas, George 1988 'Ethnomethodology as a New Development in the Social Sciences', = 1989 「エスノメソドロロジー—社会科学における新たな展開」, 北澤 裕・西阪 仰訳『日常性の解剖学—知と会話—』: 5-30, マルジュ社.
- Wieder, Lawrence D. 1974 'Telling the Code', in Turner Roy (ed.) *Ethnomethodology* : 144-172, Penguin. = 1988 「受刑者コード」, 山田 富秋・好井 裕明・山崎 敬一訳『エスノメソドロロジー—社会学的思考の解体—』: 155-213, せりか書房.
- 1977 'Ethnomethodology and Ethnosociology', *Mid-American Review of Sociology*, 2(2) : 1-18.
- The Understanding of Language Use in Everyday Life', in Watson Graham & Seiler Robert M. (eds.) *Text in Context*, Sage : 1-19.

謝辞：

本稿は、浜日出夫氏の筑波大学・社会科学研究科における授業での議論に刺激を受けている。いつもわたしの思いつきに形を与えてくれる檜田美雄氏のアドバイスに、周藤真也氏のコメンテーターとしての丁寧なコメントにも感謝する。

また、本年6月に来日されたジョージ・サーサス氏には、エスノ・ソシオロジーについて貴重なご意見をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

(おかだ みつひろ／筑波大学大学院)